

令和5年度「学生ボランティア団体活動レポート」優秀レポート一覧

【優秀レポート】 16件

(応募順)

番号	大学名	ボランティア団体名	タイトル	活動分野
1	帝京大学	ELS研究会	中学生を対象にした応急手当講習におけるボランティアの重要性 *	地域連携(交流)
2	城西大学	Happy-lucky-café	新しい風を呼び込むこと	地域連携(交流)
3	長崎大学	福祉用具作らん場	個々のニーズに合った福祉用具の製作を行い、生活の制限を減らす活動 *	福祉
4	北陸大学	北陸大学卓球部	「おめでとう」から「ありがとう」と言われるチームへ	環境 地域連携(交流)
5	和歌山大学	国際協力学生団体 WAP-CUBE	子どもたちが偽情報に惑わされないためのITリテラシー教育	国際交流(途上国支援)
6	福岡女学院看護大学	ボランティアサークル葡萄	看護の視点から考える、生活を支えるボランティアとは	福祉 地域連携(交流) 被災地支援
7	筑波大学	インドワークキャンプ団体 namaste!	「支援者」「被支援者」ではなく、「仲間」として共に創ること *	国際交流(途上国支援)
8	滋賀県立大学	BAMBOO HOUSE PROJECT	学生ボランティアの本当の意義 *	環境 地域連携(交流)
9	成蹊大学	Root Seikei	国際ボランティアの価値と私の使命	福祉 地域連携(交流) 国際交流(途上国支援)
10	京都産業大学	みらい発信局おむすび静岡 原応援隊	学生の特権を活かして	環境 地域連携(交流)
11	中央大学	中央大学ボランティアセンター 学生スタッフ	「檻」からの解放 ～ボランティアのさらなる可能性～	福祉 環境 地域連携(交流) その他(啓発活動)
12	沖縄国際大学	Teen support room 沖種	ひとり親の中学生にとっての居場所	福祉
13	新潟青陵大学	ぼらくと	想いの輪を繋ぐために私たちができること *	環境
14	東京工業大学	東工大VG(学生ボランティアグループ)	自分に誇れるボランティアを目指す	環境 地域連携(交流) 被災地支援 その他(防災)
15	滋賀医科大学	若者にHPVワクチンについて 広く発信する会 Vcan	知らないまま後悔しないで ～今知ってほしいワクチンで防げるがんのこと～	その他(保健・医療)
16	静岡文化芸術大学	引佐耕作隊	大学生による棚田での米作り *	環境 地域連携(交流)

*を付したものは特に優秀なレポート(以下にレポートを掲載)

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	帝京大学
団 体 名	ELS 研究会

タイトル：中学生を対象にした応急手当講習におけるボランティアの重要性

私たちの所属する ELS 研究会は、命を救うために必要な応急手当の知識・技術と志の向上を目指して、週 1 回の活動を行っています。活動内容としては、大ケガや生命危険がある急病の現場を想定した訓練や、一次救命処置の技能向上、応急手当を普及するための講習の練習などを行っています。土曜日は、主に東京都北区役所の依頼を受けて区内の中学校の防災訓練に参加し、中学生に対する応急手当講習を行っています。また、様々な活動を通して傷病者、関係者、応急手当講習受講者に対するコミュニケーション能力やチームワークも養っています。昨年度までは新型コロナウイルスの影響であまり活動ができていませんでしたが、今年度は北区区内中学校の防災訓練を中心に多くの活動を行っています。所属している多くの学生はスポーツ医療学科救急救命士コースの学生ですが、多くの医療系の学部が集まる板橋キャンパスの特徴を生かし、薬学部、看護学科、臨床放射線学科などさまざまな学科の学生が所属しています。このような活動の場で自分と異なる学部や学科の学生と関わるができるのは、私たち学生が卒業後にチーム医療を行ううえでも、非常に良い経験になっています。

中学校の防災訓練における応急手当講習においては、主に心肺停止状態の傷病者に対する胸骨圧迫や AED の使用方法を教えています。近年の日本では AED の大幅な普及や、さまざまな場所での救命講習会の実施などによって、一般市民による心肺蘇生の実施率は向上しています。しかし、ほかの欧米諸国などと比較すると、その実施率は約 60%と低いのが現状です。また、心肺蘇生の実施率が低いのは家庭で発生した時です。さらに、大震災の際は救急隊や病院のキャパシティを遥かにしのぐケガ人が発生することから、自分たちで何とかしなければ大切な命が失われてしまいます。大切な命を救うためには住民の自助力、共助力が不可欠なのです。このため、私たち ELS 研究会は大切な人が目の前で倒れた時や、震災時において命を救うための技術をできるだけ多くの人に身に付けて欲しいと願っています。その場に居合わせた人による心肺蘇生の実施率の向上のためにより多くの人が応急手当に対する意識を高める必要があると考えています。このため、日本の未来を担う中学生などに向けた応急手当の講習はとても有用なことだと考えています。

中学生に対する応急手当講習において意識しているのは、いかに応急手当に関心をもってもらえるか、主体的に技術を習得してくれるかの二点です。現場における救助者自身の安全確保、意識の確認、救急車の要請と AED の手配、呼吸の確認から胸骨圧迫、AED の使用など、教える内容としては一般市民向けの救命講習と変わりありません。しかし、その中で興味や関心を引くよう、また、重要なポイントを強調して教えています。また教える内容ごとに一緒にその動きをまねてもらい、説明を聞くだけの状態にならないようにしています。

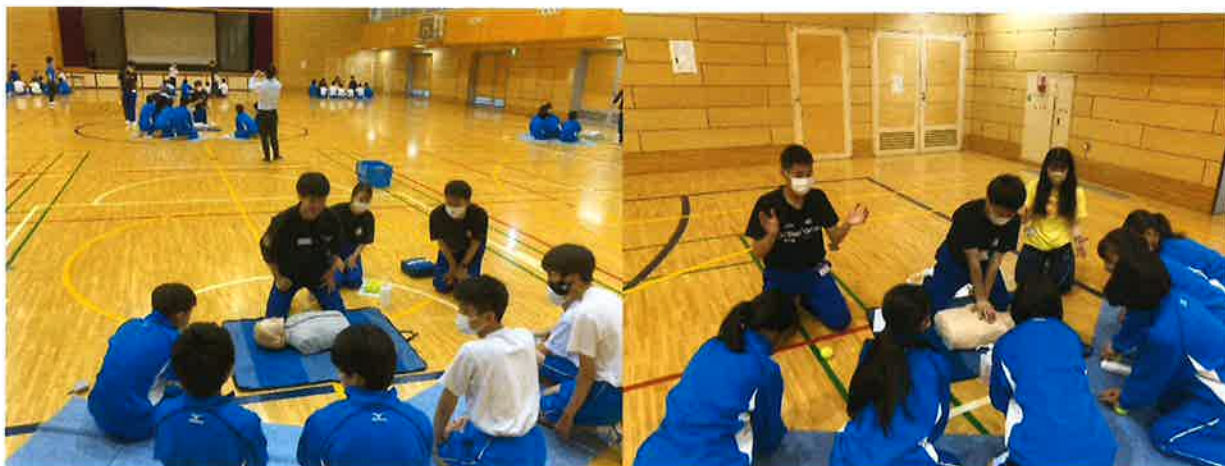
私たちの講習ではまず全体の前で心肺蘇生の一連の流れをシミュレーション形式で行います。その後 1 グループ 10 人程度のグループに分かれて講習を行っています。基本的に 1 グループに ELS 研究

会のメンバーを3人配置し、傷病者への接触から呼吸の確認、胸骨圧迫、AEDの使用方法を3人で分けて教えています。一般市民に対する応急手当講習会などでは1人がすべて説明したりしている場合があります。しかし、3人が分割して教えることで、教える側もより重要な部分を強調できたり、聞いている側も新鮮味を持って聞くことが可能になります。講習会では、グループごとにシミュレーション用の人形と模擬AEDを用いて講習を行います。それ以外に人数分、硬式用のテニスボールを生徒に配ります。このテニスボールを用いて胸骨圧迫の姿勢や圧迫の深さ、リズムなどをトレーニングできるようにしています。硬式用のテニスボールは手のひらの真ん中で押してもへこみません。手のひらの付け根の手掌基部と呼ばれる、胸骨圧迫で使用すべき正しい部位で圧迫することで始めてへこみます。そのため手掌基部での圧迫が必要なこと、垂直に圧迫する正しい姿勢を身に付けることができます。またテニスボールは球体であることから手が離れると転がってしまい圧迫がしにくいことから、圧迫解除時の手の位置も身に付きます。硬式用テニスボールは内側がゴムであり、弾力によりへこまずと戻ろうとする働きがあります。その感覚が胸骨圧迫の重要ポイントの一つであるリコイル（圧迫を連続する際、1回ごとに圧迫を完全に解除すること）の感覚と類似しているため、正しいリコイルの感覚も身につくと考えられます。胸骨圧迫などをトレーニングする人形などは数が限られており、1人当たりのトレーニング時間が限られたりしてしまいます。そのため、より多く胸骨圧迫のトレーニングを行うためにも、一般的に手に入りやすい硬式用テニスボールを用いたこの方法は有用であると考えられます。私たちはこの方法を用いて中学生にできるだけ多くトレーニングしてもらうことを重要視しています。胸骨圧迫で重要なことは数多くありますが、私たちはその内容を強く、速く、絶え間なくという3つのポイントを最重要ポイントとして講習をおこなっています。圧迫の深さは乾電池1本分、速さはテンポに合わせた曲などを使って、交代しながら絶え間なく行う実践的なトレーニングを心がけています。

救命において必要なことは、現場に居合わせた人と救急隊との連携です。現場に居合わせた人が直ちに心肺蘇生を実施し、到着した救急隊と引き継ぐことで、救命率は2倍近く上昇することが分かっています。しかし国内で発生する事案の半分ほどは現場に居合わせた人による心肺蘇生は行われていません。このような結果になる理由として、「本当に心肺蘇生を実施していいのか不安」「かえって悪化させてしまうのが心配」などが世間では挙げられています。したがって、「迷ったら行う」ということを胸骨圧迫の最重要ポイントに加えて毎回伝えています。一般の方が応急手当を実施しても民事責任や刑事責任を問われないこと、大切な人の命を守るためには心肺蘇生が必要なことを伝えることで一人一人の意識を高められるのではないかと考えています。

日本では消防本部が中心となって救命講習が行われていますが受講率はとても低いのが現状です。しかし、中学生と世代の近い我々大学生が指導することで、従来の応急手当講習よりも興味や関心を持たせられると考えます。また、中学生の家族や親戚などにも話が回り、家族や地域全体の防災意識や応急手当への関心を高められる機会になるのではと期待しています。そして、これを今後も継続することで、地域住民の誰もが家族や友人や近隣の方の命助けられるようになって欲しいと期待しています。さらに、中学生のうちから命の大切さを知ることができ、人にやさしい世の中の実現にも繋がると期待しています。誰もが安全安心に暮らせる社会の実現のためには、私たちELS研究会の活動は重要なはずですが、私たちは、この想いを胸にこれからも活動を続けていき、地域社会に貢献していきたいと思っています。

中学校の防災訓練における応急手当指導の様子



「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	長崎大学
団 体 名	福祉用具作らん場

タイトル：個々のニーズに合った福祉用具の製作を行い、生活の制限を減らす活動

私たち福祉用具作らん場は障がい者や高齢者に福祉用具を製作し提供している大学生中心の団体です。また、私には先天性の食物アレルギーがあります。私は小学生から高校生までの約 10 年間にわたり病院通いでした。どこへ行くにしても皆と同じように外食する事が出来ませんでした。今でも周りの友達のように容易に外食する事が出来ません。どこへ食べに行くにしてもそのような行動の制限があります。私はそのような経験から私と同じように生活に制限のある障がい者や高齢者の助けができるような人になりたいという思いを持ち友人と 2020 年度の冬に長崎大学にて福祉用具作らん場を発足しました。2023 年 9 月現在 11 名のメンバーで活動をしています。さらに、福祉機器の開発を専門とする元長崎大学の教員(名誉教授)の指導を受け個々のニーズに合った福祉用具を製作しています。また、コロナ渦であったため大学側から依頼者の元へ直接伺う機会が制限されていたのでサークル活動として直接訪問する事が難しく、指導教員からの情報をもとに製作を学内にて活動を行ってきました。団体が設立されて 3 年程が経ち出来たことが大きく 2 つあります。1 つ目はモノづくりを通して、地域に貢献できたことです。一昨年前は障がいによって寝たきりの子供の為に車椅子でも容易に外へ出る事が出来る様に部屋から庭へ繋がるスロープの製作、筋力が弱くなる難病により思ったように頭を洗う事の出来ない患者さんのために肘をついたままでも頭を洗う事の出来る机を製作し提供しました。昨年度は寝たきりで車椅子生活を余儀なくされている患者さんのために声で開閉が行える引き戸の電動化装置の製作を行いました。また、クリスマスには声で操作可能なクリスマスツリーを製作し障がいのある方達に配りました。我々が製作する福祉用具の特徴としては、製作コストも市販で売っているものよりも安価であり、製作前に依頼者と製作前にお会いし普段の生活において不安に思う事や不便な事を聞き出し、一人一人のニーズに合った福祉用具の製作を行っている事が挙げられます。そこで我々が現在取り組んでいる依頼内容を 2 つ取り上げます。1 つ目に筋ジストロフィーの患者さんのためにインターホンの製作、2 つ目に転倒した際にスマートスピーカーアレクサに声を吹きかけると立ち上げりの手助けの出来る立ち上がり補助器具の製作に取り組んでいます。まず、インターホンから説明します。筋ジストロフィーという病気は筋力が弱くなる難病です。そのため我々健常者のようにインターホンから離れた位置にいる際にインターホンから音が鳴ったとしても素早くインターホンの位置に移動し応答する事が出来ません。このような問題点から我々は現在スマートスピーカーアレクサ、LINE を利用して製作を行おうと検討しています。まず、訪問者が来ると LINE 上に訪問者の顔が送信されます。次に「アレクサ、インターホン ON」と言う離れた場所でもインターホンが施錠出来る仕組みです。更に、インターホンの施錠が促されると予め録音された訪問者に対する返答音声「はい、今開けます」といったような音声が発せられる仕組みを考えています。続いて、立ち上がりを促す事の出来る立ち上がり補助器具について説明します。筋ジストロフィーの患者さんは一度転倒してしまうと周囲に立ち上げりの助けとなる棒などがなければ一人で再び立ち上がる事は困

難です。このような問題点を改善する為に我々が検討しているのはアレクサに「アレクサ、立ち上がり補助器具 ON」といった音声を促す事で立ち上がり補助器具が上昇するといった仕組みを検討しています。このように生活における制限をなくす事は生活の質を上げるだけではなく、日常生活の不安を取り除く活動に繋がると考えています。また、これからはスマートスピーカーアレクサや LINE など普段何気なく使用している物もどんどん活用していきたいと考えています。以上の経験から、私達は3年間の活動を通して大学で学ぶ学生の役割を見出す事が出来て地域社会に貢献する事が出来、障がい者、高齢者の理解、生活において問題となる事を考慮に入れて製作する事の難しさを体験する事が出来ました。団体が設立されて3年程が経ち出来たこと2つ目としては、依頼者やその家族にとって心の支えとなる存在となれた事です。親戚が遠方に住まわれており早急に駆けつけるのが困難な依頼者もいます。そのような方々にとって自身の病気の事を深く理解してくれる者がいれば孤独になることなく、安心して生活できるのではないのでしょうか。実際依頼を担当している方から「私は一人で暮らしており、あなた達のように私の病気の理解をしてくれ支援をしてくれる若い人がいるととても心強い」と嬉しい声も頂きました。また、万が一災害が起こり共に生活する事を余儀なくされたとしても日常生活に不安を抱えながら生活する事が軽減するのではないのでしょうか。このように我々の活動は依頼者にとっての心の支えの存在となる事に成功しています。一方でこれからのサークル活動として改善すべき点も2つあります。上記で述べたように活動を通して地域社会への貢献に成功していますが、我々のように障がい者や高齢者に物を製作し提供する団体の数はそう多くありません。実際、我々にも多くの依頼を受けており、我々の地域には同様な問題を抱えた人たちが多くいるにも関わらず人手が足りていないのも現状です。2つ目に活動していた時期がコロナ渦という事もあり、直接患者さんの元へ訪問する機会が少なく、患者さんとの直接的な交流が少ない事が問題として挙げられます。これからの活動方針として感染対策を徹底するのはもちろん学外で生活支援のお手伝いを出来る環境に感謝しこれからの活動に精進していきたいと考えています。加えて、上記の経験を通じて私自身が成長した事は大きく2つあります。一つ目に、私の個人的な物事の視野は広がった事です。将来、企業に入り物を製作するにしても工学部で学ぶ知識だけではなく別分野における知識を活用して臨機応変に顧客のニーズに対応する必要があると考えるからです。その為、本活動の時間は私にとってとても有意義な時間でありました。2つ目に仲間と協力して物を製作する経験を積めた事です。1つの物を製作するにしてもやる事は多くあります。例えば、依頼者の元へ実現してほしい内容を聞き取りに行ったり、思った通りに動かすためにプログラミングを用いてコードを書いたり、実際に製作に使う部品を検討したり、用途に合うように木材などを寸法通り加工したりと一つも物を製作するにしても色々な作業を行わなければならないと一人で製品を作るとなるととても非効率です。その為仲間とコミュニケーションを取り作業を協力して行えた事は企業に入ってから役に立つ大きな糧となったと思います。時には意見の食い違いが起こり作業が中々進まなかったりした事もありますが、他者の意見を取り入れ最終的に製品を製作出来た時の達成感は何にもものにも代えがたいものでした。以上の事から私はこの活動を通して生活に困っておられる方の役に立つ事ができ、自身の成長の糧になる貴重な誇らしい経験をする事が出来ました。これからも誇らしい経験が出来る様に活動していきたいと考えています。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	筑波大学
団 体 名	インドワークキャンプ団体 namaste!

タイトル：「支援者」「被支援者」ではなく、「仲間」として共に創ること

私たち namaste!は、ハンセン病による差別問題の解消を目指して、日本とインドの両方で活動を行っています。かつて不治の病などとして恐れられてきたハンセン病は、日本でも流行し、断種や墮胎、隔離など国の法律までもが絡んだ大きな差別問題を引き起こしました。現在は、疫学の向上や治療薬の完成などにより完治ができる病気となっています。しかし、ハンセン病が引き起こした差別問題は、手足の奇形を含む後遺症、社会の間違った偏見などを理由に全てが解消されているわけではありません。私たち namaste!は、全国にあるハンセン病の正しい知識を身に付け、日本国内で啓発活動を行っています。さらに、団体の創立当時、新規感染者の最も多かったインドにて、差別により形成されたコロニーに住むハンセン病快復者の被差別意識の解消、家屋の修繕などのインフラ整備や教育活動を行うことで、彼らの自立に向けて一緒に考え、ボランティア活動を行っています。

まず、皆さんにイメージしてもらえよう、私たちの活動の概要を簡単に紹介します。インドでの活動は、マニプール、チャクドラ、ビシュナプールという3つのハンセン病コロニーが中心です。新型コロナウイルスの流行で活動が一時制限されましたが、2023年の春よりビシュナプールを中心として、渡航を再開しています。渡航の頻度は、長期休業期間を利用した3週間程度、年2回です。3週間の渡航に向けて、前回の渡航で得た情報を整理し、メンバー全員で半年間かけて現地でやるべきことは何かを話し合います。航空券、ホテルや列車などの手配もすべて自分たちで行います。

私たちは、これまでの渡航で、コロニーの村人たちと多くの時間を共有し、少しではあるものの、村人の生活をよりよくするお手伝いを実現させてきました。コロニーの居住環境は、劣悪な状態が多く、雨漏りで日常生活もままならない家屋、岩がむき出しで転びやすい道、滑りやすく子どもやお年寄りにとって危険な井戸など、すぐに修繕が必要なものばかりです。私たちは、家屋の状態を一軒一軒調査し、優先順位をつけ、緊急度の高い家の屋根から現地の職人とともに修繕をしたり、コンクリートできれいに道を舗装したりしてきました。修繕の資金は、助成金やNPO団体の協力などによって捻出し、現地での計画は私たち自ら考えています。まだまだ、修繕が必要な個所が多く、居住環境が改善したとは言いきれませんが、村人たちが楽しく安全に暮らせるように、日本でたくさん話し合い、準備をしています。そして、現地で私たちが最も重要だと考えている活動は、村人と楽しい時間を共有し、少しでも被差別意識を減らしてもらうことです。一見、利益の少ない活動のように思われるかもしれませんが、コロニーの村人、特に実際に差別を受けてきた高齢のおじいちゃんおばあちゃんは、後遺症や社会の偏見から、人々に避けられ辛い思いをしてきた過去があります。仕事は与えられず、物乞いで生計を立てるほかなく、お金を払ってもものを売ってもらえない、そんな苦しい経験話してくれる村人にとって、ハンセン病の患者ではない人々と楽しく話をすることは難しいものだ

ったはずで。おじいちゃんおばあちゃんたちには過去の話がたくさん教えてもらい、若者たちとは楽しく恋愛の話や仕事の話をし、子どもたちとは一緒に走り回ったりふざけ合ったり、楽しい時間を共有しています。例え、家屋の修繕などの目に見える成果が達成できなくても、村人たちは私たちが来て、同じ時間を共有することを本当に楽しみにしてくれています。少ししか一緒にいられない私たちを、コロニーの村人たちは笑顔で暖かく迎え、別れを惜しんで涙を流してくれます。この関係性は、私たちが活動によって得られた大きな成果だと考えています。

しかし、活動する中で難しい部分もたくさんあります。「支援者」「被支援者」という関係を築くのではなく、仲間として一緒に頑張ること、信頼関係をもって自立のために、村人自身の想いで行動を起こしてもらうことです。それは、私たちが彼らの生活を一生支え続けることはできず、村人にとって、私たちがお金を用意してなんでもやってくれる集団になってはいけないと考えているからです。居住環境をよりよくしたい、就労や教育問題を解消したいと団体のメンバーで日々頑張っていますが、村人が自立に向かえるように一緒に活動していくという視点を忘れないように気を付けています。ただ修理する、新しく作るのではなく、そのあと村人がどうするのか、どうなるのかを考えるようにしています。言語も文化も異なり、年に2回しか会いに行くことができない私たちは、村人たちの本当の願いを把握できていないかもしれません。私たちが考え、行動する“良いこと、正しいこと”が彼らにとっては逆の意味になってしまうかもしれない、そんな怖さと隣り合わせにあります。現地にいられる短い時間の中で、どうしたらよりよくなるか、彼らが何をしたいのかをたくさん話し、検討し、日本に帰ってきて資金調達や活動計画をたて、それが彼らの願いだと信じて活動をします。私たちは小さな学生団体で、家屋の修繕費を集めることも難しく、課題のひとつにあります。助成金やクラウドファンディング、様々な手法を試し、村人たちの笑顔が少しでも増えるなら、大切な仲間が少しでも幸せになれるならという想いをもって活動を続けています。

課題はありますが、それぞれのメンバーが強い気持ちを持ち、たくさん議論し、想いを共有して活動をしています。ボランティア活動と聞くと、難しいことばかり思い浮かぶかもしれませんが、きっかけは、なんでもいいと考えています。実際に namaste!にもボランティアがしたいという理由で参加してるメンバーもいますが、インドに行ってみたい、インドがなんとなく好き、雰囲気だけで参加したというメンバーもたくさんいます。それでも、村人たちと関係を築くこと、団体のメンバーと語り合うことを通じて自分の新しい居場所を見つけていきます。学生である私たちがボランティアとして成し遂げられることはとても小さく、理想とはかけ離れ、そのギャップに悲しさを覚えることもあります。ですが、アクションを起こせたこと、村人に会いに行き話をする、それだけでボランティア活動として、とても意味のあるものだと考えています。namaste!には、村人たちを大切に想う温かい気持ちが受け継がれています。私は、今後も温かい気持ちをもって活動を続けていきたいと考えています。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	滋賀県立大学
団 体 名	BAMBOO HOUSE PROJECT

タイトル：学生ボランティアの本当の意義

BAMBOO HOUSE PROJECT の活動を通して、私は様々な学びや新たな価値観を見出すことができました。この経験を通じて得た、ボランティア活動の意義と必要性についてボランティア未経験の学生たちに伝えたいと考えています。

このプロジェクトを通して変化したことや得られたことは様々あります。中でも、本来の目的である、放置竹林を魅力のある竹林に変化することができたことは建築学生の私にとっては貴重な経験となりました。この学生ボランティア発足後今年で十数年経ちます。敷地となる竹林は元々は竹が鬱蒼と生い茂り、日当たりも悪く町の治安をも悪化させていた放置竹林でした。そこでこの学生ボランティア活動により放置竹林を再生させることとなりました。この学生ボランティアは建築学科の構造を専門とする研究室が主導で活動しており、特に竹の特性を生かした研究などを中心とした研究室になっています。そこで放置竹林内の竹を使用して、竹のしなりや強さを生かして竹林内に建築物を建設しました。その結果、放置竹林時代には人が近づかなかったが、現在では近所の子供たちが学校終わりに集まって走り回るような魅力的な竹林に生まれ変わりました。

このボランティア活動は、学生と先生で制作物のデザインや構造的な解析など幾度にわたる話し合いを行ったうえで、設計をして施工に入りました。実際にこの活動は、デザイン案の作成、意匠設計、構造設計、工程の作成、施工方法の考案など、実際の建築会社が仕事として行っている様な手順を踏んで完成までたどり着きました。学生だけのボランティア活動ではなく、外部の方とのボランティア活動であるので、工期や設計のデッドラインが決まっている中での作業でした。このように学生ボランティアとしては少しハードな部類に入ると思います。そのため設計に行き詰まったり、徹夜で作業するような苦難もありました。時にはなぜこのような作業をしているのか分からなくなることもありました。今までの大学生活で行ってきた作業は学校の課題やアルバイトなど、すべて自分の為にやっていたものでした。そのため、辛い時には自分の為ではないボランティア活動には意味があるのかということさえ考えました。しかし、このようなボランティア活動はもちろん自分の成長の為でもありますが、なによりの目的は町の方や子供たちに喜んでもらうために行っているものだということに気づき、人の役に立つために行動することへの誇りを持ち始めました。プロジェクト開始当初は困難に当たる度にあきらめかけていた自分が、自分の行動によって他の人の役に立つということを自覚し始めた途端、困難にも打ち勝つようなやる気が湧いてきました。この時に初めてボランティアの意義に気づくことができました。

このように放置竹林を子供たちが集まる明るい竹林に変化させるのは、学生の力だけでは不可能でした。そこでお世話になった方が、地元のまちづくり協会の方です。町の方と学生が手を取り合い、協力することでこのプロジェクトは成り立っています。このプロジェクトで一番の成果は、放置竹林の再生だと考えがちですが、我々学生にとっての一番の成果は、普段関わることのない地元のまちづ

くり協議会の方や子供たちと交流することではないかと考えています。もちろん、研究室での研究成果を実際の竹林で実践的に制作して竹林を更なる居心地の良い場所にするのもボランティア活動では大切ですが、学生ボランティア活動の観点からみると、普段関わることの少ない人と関わりながら一つの目標に突き進む。そして、その成果を子供たち含めてみんなでその成果を喜び合う。これこそが学生時代に体験しておくことであり、学生ボランティアの意義ではないかと考えます。

ボランティア活動は個人と社会の両方に多くの利益をもたらすものであり、ボランティア活動がなければ今のような世の中はなかったと考えています。学生時代にボランティアをする時間は、社会人における時間よりも莫大な時間があります。アルバイトや遊びをして学生生活を謳歌することも非常に大切なことだと思います。大学生生活4年間あるほんの一日でも一時間でもいいです。一度だけボランティア活動を体験してほしいと思います。自分でない誰かの為を思って行動することで、新たな考え方を得ることができると思います。私自身も大学生活でボランティア活動をするつもりはありませんでした。しかし偶然このボランティアに参加することとなり、最初はボランティアがどのように自分に利益をもたらすかしか考えていませんでした。ですが次第に、地域の方や子供たちと触れ合うにしたがって、自分の利益のためでなく他の人のためを思って行動することの重要性に気づきました。今回紹介した学生ボランティアは主にもものづくりが好きな建築学生が行っているもので、誰もが参加できるボランティア活動ではないかもしれませんが、世の中にはいくつもの学生ボランティアが存在しています。まずは、周りにあるボランティア活動に友達と行ってみたい、ネットで学生ボランティアを探してみるといった第一歩を踏み出してほしいと思います。社会人になれば、行動することの基準がお金になることが多くなるでしょう。自由な時間がある学生生活であるからこそ、お金では買えない考え方や体験を試してみるのもいいのではないのでしょうか。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
団 体 名	新潟青陵大学ぼらくと

タイトル：想いの輪を繋ぐために私たちができること

私は現在、大学のボランティアセンターにて学生ボランティアコーディネーター、通称「ぼらくと」として、学内のボランティア活動の斡旋や日々移り変わる社会情勢にも目を向けながら多岐にわたる活動を行っています。その中の1つとして、近年は環境整備保全活動にも力を入れています。活動を行うきっかけとして、大学近隣のコミュニティ協議会（以下、コミ協）の方と出会い、環境整備活動をご一緒したことからはじまりました。本学は日本海がすぐ隣という立地にあり、海岸沿いには松林も多く広がっています。しかし今まで、松林が風害や潮害、土砂崩れなどの山地災害から住まいや農地を守り美しい景観を保持するのに重要な役割を果たしている事を知らず、正直、気にも留めていませんでした。さらには近年、「松くい虫」の被害により松が枯れてしまい、年々数が減ってしまっている現状をコミ協や松に詳しい大学の教員より学ぶ機会があり、そこで初めて松林の役割や課題について知ることとなりました。そういった学ぶ場を契機に、その後市役所の方とコミ協の方と一緒に植樹活動や幼松の成長を阻害する雑草の除草を年数回活動行っています。こういった活動が広がり、今では授業と連携し、大学周辺の松林の除草作業や海岸の清掃活動、NPO 法人と共同で月2回松林の整備（ニセアカシヤの伐木や除草作業、伐木のチップ化等）の作業を同学園の高校とも連携しながら継続的に行っています。ひとつのきっかけで広がってきた環境整備保全活動ですが、活動を継続して携わり、得られたことが大きく2つあります。

1つ目は、「身近な問題」に目を向けることの大切さです。活動を行う前までは「松くい虫」という存在も被害の状況も、それらが私達の生活にどのような影響を及ぼすのかという事の重大さを恥ずかしながら知ることありませんでした。活動を通して市役所の方やコミ協の方、森林整備をされているNPO 法人の方々と話す中で、松林の役割や松林が無かったらどうなるのかということの間近で感じた場面が多くありました。実際に、松くい虫の被害で枯れてしまった松や、以前は多く生え広がっていた松林も海が見えるほどスカスカな現状を間近で見て、他人ごとではないという気持ちになりました。そういった気にも留めていなかったけど意外と身近な社会問題を実際に教えていただきながら作業を通して知り、学ぶ事で、今までは聞き流してしまっていた環境問題の報道などにも目を向け

るようになりました。外出先でも松林を見かけたときには気にしてみたり、ゴミであふれた海岸を見ると、悲しい気持ちになることも多くなりました。それと同時に、どうしたらこういった現状を1人でも多くの学生や地域の人に知ってもらい、行動してもらえるか、1人では解決できなくても多くの人の意識が少しでも変われば、何か行動できるのではないかと思うようになりました。「環境」に限らず、「知る・学ぶ」ことから問題意識に繋がることを身をもって感じる経験となっています。今は、少しでも多くの学生に経験を通して知ってもらえるように、他機関の力も借りながら、ぼらくと内に「環境チーム」というチームを立ち上げ、環境に関する活動をより積極的に参画するように努めています。こういった地道な活動を地域の方々も見てください、最近では“環境”に関する様々なご依頼や連携活動のお話をいただく機会も増えました。社会課題の解決は1人では難しくても、まずは知ること、感じる事を通して自分事として意識すれば何か行動に移せるのではないかと気づくことができました。

2つ目に、活動を通してボランティアの根源でもある「助け合い」の重要性を感じられていることです。私たちが活動する上で、行政の方、コミ協やNPO法人などの地域の方々など、どうにかせねばと汗水流して誰かが見ていないところでも作業をしている想いのある方々とご一緒することが多くあります。知識や経験を得られることももちろんですが、私たちが安心安全に暮らせている裏では誰かが草を刈ったり、松林の再生の為に植樹を行ったり、悪影響を及ぼす木々の伐採や遊歩道等の管理保全を行っている人々がいるというあたたかさや助け合いを改めて感じることも多くありました。“誰かの為に”、“何かの為に”そういった想いが繋がり、活動の輪が広がっていくのをまじまじと感じ、そういった方々とご一緒することで、人のあたたかさや、想いを感じ、人と関わることの大切さ、想いを共有することの大切さ、そして1人で頑張るのではなく、それぞれの強みを活かして協力して活動を行う「助け合い」の重要性を学ぶ機会になっていると感じています。環境の活動に限らず、様々なフィールドの方々と一緒に関わり、関係性を築き、様々な交流ができることもボランティアの魅力であり価値であると考えます。

以上のように、ボランティア活動を通して感じたことや学びは数えきれないほどありますが、ボランティア活動に参加するきっかけは様々でも、ボランティア活動を通して知ること、学ぶ事、経験することが本当に多くあると感じます。活動を通して、今まで知らなかった身近な問題が社会には多くあり、他人ごとではないことを感じることもボランティアの魅力であり、何かアクションを起こすきっかけにもなると思います。こういう想いをどのようにしたら他の学生や若い世代に伝えられるのか、私たちの課題でもあります。自分だけが学ぶ・経験するのももちろんですが、“ボランティアの魅力”や“価値”を多くの方に伝え、想いが広がっていけば、社会を少しでも変えられるのではないかと考えます。しかし、実際は目の前のやるべき作業や自分自身のことパンクしそうになることも多くあります。ですが自分たちが整備した場所で子どもたちが遊んでいたり、作業中に道行く人たちに“ありがとう”“お疲れ様”と言ってもらえると単純に嬉しいです、見ててくれる人がいること、誰かの為になっている事を感じ、やりがいに繋がっています。

微力ではありますが、私達ぼらくととして、今後も学生だけの視点ではなく、様々な活動に実際に足を運び、多くの人と出会い、今の社会情勢を現場で学び、私たちができる社会の為の活動をコツコツ継続して続けていきたいと思っています。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大学名	静岡文化芸術大学
団体名	引佐耕作隊

タイトル: 大学生による棚田での米作り

私たち「引佐耕作隊」は、静岡文化芸術大学(以下、文芸大)の学生団体として、浜松市北区引佐町久留女木地区にある「久留女木の棚田」で米作りを行っています(図 1)。2023 年現在、メンバー16 名で活動しており、4 月の田起こしから 10 月の収穫までを学生主体で行っています(写真 1,2)。また収穫した米は、毎年 1 月中旬に「久留女木 棚田の恵」という商品名で、文芸大の生協購買や浜松市内の商業施設で販売しています(写真 3)。その販売で得た収益を、次年度の活動資金とすることで、持続的な活動を目指しています。

文芸大から北西におよそ 30km のところに久留女木の棚田があります(写真 4)。約 800 枚の田んぼが織りなす美しい景観が評価され、2011 年には県の「第 4 回静岡県景観賞」を受賞しました。さらに、2022 年には農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に認定されました。

しかし、棚田は傾斜が急であり、それぞれの田んぼの面積が小さいため大型の機械を入れることができません。そのため、ほとんどを手作業に頼らなければならず、身体への負担は大きくなります。地元耕作者の高齢化が進行している久留女木の棚田では、将来的に耕作放棄地が増加することが予想されます。

一方で、棚田には土砂崩れを抑制することや美しい景観をつくることなどの「多面的機能」があります。その機能は、棚田から離れた都市住民にも恩恵をもたらします。棚田で耕作されなくなると、その機能が失われてしまいます。そこで、耕作放棄地を解消し「多面的機能」を発揮させることを目的として、2016 年 4 月に文芸大の学生有志により「引佐耕作隊」が結成されました。

この活動のなかで「農業技術」「移動手段」「自主財源」「メンバー確保」「急な環境変化への対応」という 5 つの課題に直面することになりました。

1 つ目は「農業技術」についてです。農家ではない私たちは、農業に関する技術や知識をもっていません。そのため、普段から棚田で耕作している地元耕作者にアドバイスをいただくことで、それなりに米作りを行うことができます(写真 5)。地元耕作者からは、自身の耕作経験から培われた身体的技術を教えていただいています。ただし、棚田では田んぼそれぞれの耕作条件が一樣ではありません。そのため、地元耕作者によってアドバイスは異なり、どれを参考にするか迷うことがあります。加えて、地元耕作者のアドバイスを聞くだけで理解することは難しく、自ら体現しその身体的技術を習得することは困難だと気づきました。

2 つ目は「移動手段」についてです。久留女木地区は公共交通網が整備されておらず、移動には自家用車またはレンタカーが欠かせません。しかし、大学生が車を使用するうえで難しい点があります。それは、金銭面での余裕がない大学生にとって、レンタカー代やガソリン代は大きな負担となること、そして運転免許取得から日が浅いため、運転技術が未熟であることです。その技術は、

活動を継続していくために重要であり、農業技術と並んで身につけなければならないことだと感じました。

3つ目は「自主財源」についてです。基本的にボランティア活動は無償で行われます。しかし、なかには財源が不足し、活動が継続できない団体があることも耳にします。そこで私たちは、収穫した米を毎年販売することで、活動継続に必要な財源を確保しています。販売の工夫として、300gを1袋として、消費者が手に取りやすいようにしています。また、米の販売で使用するパッケージは、文芸大のデザイン学部の学生に依頼し、「多面的機能」をイメージしたものにしていきます(写真6)。「多面的機能」は、都市住民にも恩恵をもたらすにもかかわらず、その生産コストが市場価格には反映されない外部性をもっています。そこで「多面的機能」の価値を価格化するために、1袋500円と市場よりも高い価格に設定しています。それにもかかわらず、毎年完売することができています。しかし、活動を継続するうえで課題もあります。一つは、作業に関する費用のすべてを捻出することができていないことです。現在の米の販売収益では、レンタカー代やガソリン代などの交通費までを賄うことができていません。これを賄うために販売個数を増やしたいところですが、私たちの生産能力にも限界があり、それを実現することは現状では困難です。もう一つは、米の販売場所が偏っていることです。米は、文芸大の生協購買や浜松市内の商業施設で販売しています。しかし、購入者の半数は大学生であり、幅広い世代に販売することができていません。そのため販売場所を増やし、より多くの人びとが購入できる機会を創出するべきだと考えています。

4つ目は「メンバー確保」についてです。私たちは学生であることから基本的に週末しか作業ができず、1度に多くの作業を行わなければならないため、人手が必要です。さらに、学年ごとにメンバー数の偏りがあり、農業技術を継承し続けられるかが課題となっています。そこで、毎年新入生を対象に、興味を惹き入会に結びつくような勧誘を行い、安定的なメンバーの確保を目指しています。

5つ目は「急な環境変化への対応」についてです。年間を通して農作業を行ううえで、大雨や台風などの悪天候、モグラやサワガニなどが開けた穴からの水漏れ、シカによる獣害などの突発的な環境変化に対応する必要があります。しかし、週末しか作業ができないため、迅速な対処が難しくなっています。そこで、私たちが対応できない部分に関しては、地元耕作者に対応していただくこともあります。今後は、平日の授業がない時間にも作業を行うことで、様々な環境変化に対応できる体制を構築することを検討しています。

この活動で5つの課題に直面しながらも、分かったことがあります。それは、活動を行ううえで地元住民との関係構築が必要不可欠であるということです。私たちは米作りで培った地元住民との関係や信頼を大切にしながら地域で行われる年中行事にも参加し、地域づくりを手伝っています。引佐耕作隊の活動を通して、ボランティア活動で重要なのは、ただ相手の課題を解決するだけでなく、課題の解決を通して相手との関係を構築することだと気づきました。それが可能となっはじめて長期的に活動を継続することが可能になると考えています。今後も、これまで構築してきた地域との関係を大切にしながら、地域に密着した活動を継続していきます。

活動体験レポート 添付資料

(写真1) 田植え (2023.6.17)



(写真2) 稲刈り (2022.10.29)



(写真3) 「久留女木 棚田の恵」販売(2023.1.12)



(写真4) 久留女木の棚田



(写真5) 地元耕作者から脱穀機の使用方法についてアドバイスを受ける(2022.11.12)



(写真6) 「久留女木 棚田の恵」パッケージ



(図1) 浜松市北区引佐町「久留女木の棚田」の位置

